

発展途上国が貧困から抜け出すための開発 ～ラオスと中国の関係からの考察～

西尾 彩

【要旨】

本論文は、発展途上国が貧困から抜け出すための海外援助の受け入れ方や開発のあり方を論じている。具体的には、ラオスが中国からの援助にどのように向き合い、開発を進めていくべきかを「開発経済論」や「内発的発展論」の理論研究と現地調査を踏まえて考察した。

ラオスは、歴史的に中国からの支援に頼っており、現在も鉄道建設などのプロジェクトが進められている。鉄道建設にあたっては、中国の技術や資材・人材が用いられている。このような支援のあり方は、ラオスの経済発展やラオス人の雇用創出につながるのか疑問である。

ラオスの発展のためには、海外援助を受け入れることが不可欠である。しかし、援助を受け入れる際には、自国の産業を活用することや、自国の雇用を拡大させる仕組みをつくる必要がある。ただし、ラオスでは経済発展を担う人材が十分に育成されてない。そのため、人的資源開発すなわち教育に力を入れることが重要である。

【講評】

本論文は発展途上国が貧困から抜け出すための海外援助への向き合い方や今後の開発の在り方について検討している。発展途上国のひとつとされているラオスは近年、東アジアでの国際政治の大きな変化以降、貿易面において期待をされ脚光を浴びている。だがその一方で外国からの援助がなければ国家経営が困難である。このような現状を踏まえ、内発的発展論を中心に議論を進めることで、貧困から抜け出すためにはその国の地域特性や文化を考慮し、これを活かした開発を行っていかなければならないことを本論文は指摘している。そして、それぞれの地域の自律的な発展の動きを支援される必要性だけでなく、それに基づき、開発を行う事でその地域に利点があるものとして承認されるプロセスが必要不可欠であることを本論文はあきらかとしている。本論文は世界的な課題として着目されている発展途上国の貧困問題について、多角的な視点から分析・考察した点を評価したい。